Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 空を見つけた傾斜の土地 ： ボクの家プロジェクト「再現部」 |
| Author(s) | 堀, 寛史 |
| Citation | 臨床哲学. 2010, 11, p. 75-90 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/7338 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 空を見つけた傾斜の土地
## ――ボクの家プロジェクト「再現部」

堀　寛史

### はじめに　――「展開部」から「再現部」――

ボクの家プロジェクトを宣言してから、３回目の報告である。施主と建築家、つまり、素人と玄人がまず文字を通して概念的な家作りを始め、知識と情報の交換と補完を行い、長い時間をかけ熟成し、形作りという意味での家作りがいよいよ始まった。しかし、この報告を書いているときにはまだ、家は形作られていない。現状では住宅の設計がおおかた決まり、着工のための準備をしている時期（概念と形の間にいる時期）である。

ところで、このプロジェクトはこれまでソナタ形式で報告してきている。ソナタ形式とは提示部―展開部―再現部―終結部（コーダ）という４部構成でなりたっている。今回はその再現部にあたる。再現部では提示部と展開部の主調が再現される。私たちがこれから書き記す内容もそのようになるはずである。

2009 年の前半に土地に出会い、それを購入し、実際の家作り（概念から形への移行）がはじまった。今回の報告で私の部分では実践の部分に進むことができ、形を得るという実践の間に根本的な違いを経験した。その経験の中から住むことについて改めて問い、施主の役割が何であるかを考えた。施主こそが住むのであるからその問いから逃げてはならない。つまり、あらかじめ建っているところに移り住むのではなく、住むという目的があるので家作りを行うのである。今回はそのことについて触れることができた。それが私にとっての再現部であったと思う。そして､実際に始まった家作りの経過と苦労話を書いた。家作りにおける理想と現実を垣間見ることができると思う。

小野氏において、これまで２度の報告から得られた知見を押し広げて、制作における重要なキーワード､「新鮮な自然さ／自然な新鮮さ」に導かれたように至った。これまでの思考を再現したことによってなしえたのである。小野氏は以前から「外と内」や「ものとこと」といった相対概念から論理を構成することが多い。それは何かしらの対象（場合によってはぼんやりしたもの）をつかみ取るための方法としてそのように構成してきたの

だと思う。しかし、今回、先のキーワード「新鮮な自然さ／自然な新鮮さ」をあらわすため同じようなアプローチで進んでいくのだが、相対できないものと出会う。それは実際に存在するものとして、また重要なメタファーとして「空（そら）」の概念である。この概念に至った小野氏の中にどのような形が目を覚ましたのだろうか。

次回のコーダ（終結部）を書いている頃には実際に住んでいるだろう。そして、そのまま末永くそこに住むことになるだろう。これまで行ってきた協働により家は形になりかけている。ボクの家に住むまであと一歩の所にたどり着いた。今の興味は住むために建てた家がどのような形を持つのかである。そしてこのプロジェクト自体がどのような意味を持っているのかである。そこにたどり着くために今回の報告の到達点はお互いにとって、そして何よりもボクの家にとって重要な意味を持つであろう。

# イメージから形の間に住む
## ボクの家プロジェクト施主編「再現部」

堀　寛史

我々は、住むことを能くする場合にのみ、建てることができる

マルティン・ハイデガー

### 1. 住むための家を建てること

幼児的万能感の中にあった壮大な野望や胸躍るような冒険物語を夢見るよりも現実的な自分の存在について強く意識できるようになってからは人生に安定を求めるようになった。親の元を離れ、仕事に就き経済的に自立し、家庭を持ち、人生におけるいくつかの不安から解放されたような気がした。そして人生は安定したかのように思えた。しかし、その安定していると思っている最中には何が安定で何が不安定なのか考えていなかった。単に、社会的地位や収入の中にその価値を置いていた部分が私の中に確かにあり、一部での安定に浸っていた。つまり、不特定の誰かと比べた自分について、安定なのか不安定なのかを判断していたに過ぎないのだ。そう考えるとまだ幼児的万能感の中にいた頃とあまり違わない自分と出会う。

家を手に入れようと思った当初の理由はおそらく「家を建てること」という行為の方に重点を置いて考えていたと思う。それはステータスシンボル（かつてあるクレジットカードの審査基準に自家保有の項目があった）としての家であり、住むことを主体としていない。単に、保有するために建てる家である。そこに経済的な安定によって家を建てることができる自分の中に一種のナルシシズムを見て取れる。初めの頃どのような家に住むべきかの問いが希薄であり、考えたのはどのくらいの金額で家を建てられるのか、その程度であった。

住むための家を見るより値段を見ていた頃、よくわからない違和感を覚えていた。それを少しでも解消できればと思い、2006 年 7 月 12 日に一冊のノートを購入し、まだ見ぬ家と向き合うことにした。そのノート（住宅ノート）は「良い家」について時間をかけて

考えていこうという内容からスタートしている。このノートの作成を契機に家を建てられるというナルシシズムから、住むための「家を建てること」へ意味は変化しようとしていた。この変化が真摯に住むことに向き合うことであった。そしてノートのページが埋まっていく経過の中で違和感は少なくなっていった。ただし、違和感の変化に伴い次々に家に対する問いが現れ、それを少しずつ解決していかなければならなくなった。

解決しなくてはならない課題の中心は住むこととは何であるかを明らかにすることである。この課題にこれまで２つの論文[1,2]を通して考えてきた。今回もそれを避けて通れず、そこに足を踏み入れることから今回の内容に進んでいこうと考える。

## ２. 住むこととは何か

住むことは普段の私たちの生活の中で当たり前になされている、そう思っているといって間違いはないだろう。居住する所がどのような形であれ、どこかに住んでいる。それは寝食をする場所にいることであり、暮らすことである。生まれ落ちてから、今までどこかに住んできたのである。そしてこれからもどこかに住むのである。しかしながら今住んでいるからと言って、住むことそのことを十分に理解しているとは言えないだろう。このようなことは当たり前であるからこそ、それを探求し、知りうるには困難を伴う。本節ではその困難の解決に挑戦してみる。その挑戦への足がかりとしてハイデガーの考える住むことを題材として取り上げ､そこから私にとっての住むこととは何であるかを考えてみたい。

ハイデガーは『存在と時間』（1927）第１部 第２章 第12節の中で「世界内存在」の分析を行い、内存在について「何かの内で存在すること」ではないとし、以下のように述べている。

> 「内」in は innan- に由来し、これは住む、居住スル、滞在するということであり、「で」an は、私に慣れている、何々と親しんでいる、私は或ることを手がけているという意味である。「内」は、私ハ住ミツクとか私ハ敬愛スルという意味での私ハ世話ヲスルという語義を持っている。――中略――私があるというときの「ある」という表現は「もとで」と連関があり、「私がある」は、これはこれで、私は、何々のもとで、つまり、これこれしかじかに親しまれているものとしての世界のもとで住んでいる、滞在していることなのである。「私がある」の不定法として、言いかえれば、事

実範疇として解された存在は、何々のもので住んでいる、何々と親しんでいるということを意味する。したがって内存在は、世界内存在という本質上の機構をもっている現存在の存在を、形式的に実存論的に言いあらわしたものなのである（傍点原著者）（ハイデガー .2003.pp.138-9）

ここでは内存在は空間的あるいは範疇的な存在ではなく、実存論的存在であると述べられている。注目すべきは「内」の解釈であり、それは住むこととされている点である。「私がある」ことが住むことでもあり、親しまれているものとして住んでいる。また、敬愛スル、世話ヲスルという形で私たちは住んでいるのである。ここでは私の存在と住むことの関係について述べられており、住むこと自体が私たちの存在を規定していると読み取れる。

このことを踏まえた上で、『存在と時間』の後にハイデガーが分析した住むことを確認していく。そのために「建てる 住む 思考する」（1954）を参照する。これはハイデガーが「ダルムシュタット会話」（1951 年）のシンポジウムの中で話したものを論文として発表したものである。その中でハイデガーはまず「すなわち建てることは、単に住むことへの手段や方途ではない。建てることはそれ自体において既に住むことである」（ハイデガー .2009.p.129）と述べている。これは住むことが目的であり、建てることが手段であるといった二分的な関係性ではなく、住むことそのものに建てることが従属していることを指している。まずそこに家があるのではなく、住むことがあり、建てることが出現するのである。内存在の分析において住むことは存在そのものであった。そのことから住むために建てるという関係性は理解できる。

次に、「建てる 住む 思考する」の中で住むことはどのように定義づけられていたのかを確認する。ハイデガーは「住むとは何であるか」との問いについて、住むこと（Wohnen）と建てること（Bauen）との語源の比較から読み取ろうとする。そして、以下のように述べている。

1　建てること Bauen は本来、住むこと Wohnen である。
2　住むことは Wohnen とは、死すべき者どもが地上にあるその仕方である。
3　住むこと Wohnen としての建てること Bauen は、自らを解き開いて、育む Bauen すなわち成長――および建物を築き上げる Bauen である（同上 ,p.132）

そして、「住むことの基本輪郭は赦し免ずること（Schonen）」（同上 ,p.133）であるとし、「赦し免ずるとは、四なる集い[3]とその本質において保護すること」（同上 ,p.135）であると述べている。Schonen の辞書的意味は「いたわる、大事にする」であるため「保護する」との理解が最も適切であると考えられる。つまり、住むとは保護し、世話ヲシ、敬愛スルこととも言えるのである。このことからもハイデガーにとって住むことは私たちの存在そのもののあり方であると言え、そして、その存在を成長させることが建てることであるのだ。この考えから、住むために建てるとは、私たちの存在を「 保護し育む 」、「 世話し成長させる 」というあり方であることがわかる。

そしてこの住むことは物によってその存在を顕わにされる。「住むことはむしろ、いつでも既に物たちのもとに滞在することである。赦し免ずることとしての住むことは、四なる集いを、死すべき者どもがそのもとに滞在するものの中に、すなわち物たち Dinge の中に保匿するのである」（同上 ,p.135）。この物とは建てることにおいて建物である。この物は数学的（数値的）空間にあるのではなく、場所（ort）にある。この場所とは或る特定の場所であるのだが、私たちにとってそれがそこにあると思わせている場所（想いを向ける場所）である。このような場所に私たちは建てることができる。それは前述の内存在の空間的あるいは範疇的な存在ではなく、実存論的存在であるという部分に関わってくる。

それらを踏まえハイデガーは「我々は、住むことを能くする場合にのみ、建てることができる」（同上，p.144）といったのである。これには単に偶然に滞在するのではなく、その場所で私たちそのものを保護し、育むことができるが故に、居るために建てることが許されるのである。ハイデガーにとって死すべき存在である私たちが住むために建てることについて問立て、それについて思考に値する何かとして考え続けることが重要であるのだ。おそらくそれが私たちのひとつの存在のあり方なのであろう。

以上のことからハイデガーにとって住むこととは、物（建物）によって開かれた場所で、自らを解き開いて育むこと、そして死にゆくことであると読める。このあり方をあらかじめ考えることによって建てることができ、そして住むことができるのである。そのことを「住むことは、死すべき者どもがそれに従いつつ在るような、存在の基本輪郭である」（同上 ,p.145）と述べたのである。

このような解釈は昨年の報告で小野氏が述べていた「Living room / Dying room」の発想に近いのではないかと気づかされた。私たちが生き、そして死にゆく存在であるならば、

必然的に住むことはその中にある。「Living room / Dying room」はその空間機能としての存在ではなく、場所としてあり、その場所を通して私たちの人生を表現する所なのではないだろうか。

ハイデガーの住むことを考えた後に、これから私たちの文化における住むことはどのように考えられているのかを漢字の語源から考えてみる。これはハイデガーの語源を探る試みと同じ意味を持つ。その中から私にとっての住むことは何であるかを明確にしたい。
白川静『常用字解』で「住」を引いてみると以下のように解説される。

> 形声。音符は主。主は灯火の形で、●が灯火が燃えている炎の形で、その下の鐙(あぶらざら)とその台である。灯火の台は直立しており、柱と似ているところがある。柱を並べて建物を建てて人の住む所を住という。それで「すむ、すまう」の意味となり、また「とどまる」の意味があるので、久しく駐まる所を住居（人の住んでいる家や場所）という（白川 .2003.p.288）

住は火の付いた灯火（主）の横に人がいる状態を表現している。灯火は古来では長老によって守られる神聖なものであった。そして、直立した「柱」で灯火を守り、先祖を祭る神聖な建物である廟(みたまや)が「家」である。字の成り立ちから見ると「家」が甲骨文字であり、「主」が金文であるので「家」の方が古い。その後に「住」ができていることになる。想像になるが、人が灯火を自由に使えるようになって初めて「住」という文字が必要とされたのではないだろうか。この灯火の使用により夜の生活が変化し、人類は活動時間を太陽の光に委ねなくても良くなった。また、冬の寒さも火を使って調節し、活動範囲が広がったとも言える。

次に現代における灯火が持つ象徴的な意味について考えてみる。その象徴的なことをマイケル・ローゼンの『悲しい本』(2004) という絵本や荒井良二の『きょうというひ』(2005) という絵本の中に見ることができる。特に『悲しい本』の中で、ローゼンは息子の死を悼み、その悲しみから立ち直るためにろうそくの灯火によって希望を導き出そうとする。ここに灯火が象徴的に希望を意味していることが確認できる。またアンデルセンの「マッチ売りの少女」（1848）も炎の中に希望を見いだした。私たちにとって灯火（炎）は象徴的に希望を含んでいるのではないだろうか。

サイモン・クリッチリーは『哲学者たちの死に方』（2009）の中でガダマーは人間に最

も必要なのは希望であるという到達点に至ったと述べている。希望があるからこそ私たちは生きていけるとガダマーは考えたようである。つまり、希望は人生の足下を照らす灯火のようなものかもしれないのだ。ここまでの飛躍は半ば妄想的かもしれないが、住むと灯火と希望はどこかでつながっており、無関係ではないと私は考えている。

では、結局、住むこととはいったい何なのであろうか。一昨年の報告では住むことについて考えるために私自身の物語りを読み込むことが必要であると述べた。また、昨年度の報告で私は住むことを熱の安定であると捉えた。それは量的・質的な熱であり、単純に温度に還元されるのではなく、快適さや調和、美を含意している。そして、今回、ハイデガーから住むことは住むこととは、物（建物）によって開かれた場所で、自らを解き開いて育むこと、そして死にゆくことであると述べた。さらに、「住」の語源から灯火と希望の意味を導き出した。これらを以下のようにつなぎ合わせ、住むことを考えてみる。

まず第１に、「家に住む」との条件が必要である。その家を通して住むが表現されるからである。しかし、住むことをあらかじめ考えて建てる必要がある。第２に、住むのは私であり、家は私の生き様を育む場所である。これまで刻んできた物語りをその場所で受け継ぎ､続けていかなければならない。さらには私の家族にも同様のことがいえるのである。第３にその生き様は快適さで支えられる。快適さとは安定でもあり､その上で日々を育み、希望の中で生きていく。これら３つのことが混じり合う場所が家であり、そこに在ることが私にとっての住むことなのだと考える。

まだ不十分な理解であるが、私にとっての住むことの形が少しできあがってきたように思える。そして、このような想いを持ちつつ、2009 年の 1 月から実際の家作りを始めた。それは想い（イメージ）を形に変える作業であり、これまでに打ち立ててきた概念を実践することでもある。その実践をまだ途中であるがこれから報告していくことにする。

## ３. 土地との出会い

家を手に入れたいと考えたとき、多くの場合、理想の家を思い描きつつ施主の年収と事前資金（一般的に頭金と言われるもの）から､どのくらいの資金が準備できるかを考える。多くの場合住宅計画は、まず最初にこの金銭的な枠組みに囲われることから始まる。そして、現在の職場との距離や家族の生活状況（例えば、子供の教育場所）などを考慮して、どの地域に住むか（住むことが可能か）を考える。幅広い選択肢から、ただ一つを選び出

し、そこから生涯動かないつもりの場所を決める判断は簡単でない。さらに理想を夢見て、感情的にそこに住みたいと思っても金銭的制限は目の前に強力に立ちはだかる。住宅計画は数多くの理想と数多くの現実のすり合わせが最後まで続く心身に疲労を蓄積させるプロセスであると経験的に断言する。

今回、有る特殊な土地と出会い、土地購入のプロセスを経験した。さらに、家を形作るための施主（家族）と建築家との協議も経験した。いくつかのことについて、過ぎてしまえばたいしたことがなかったように思えるが、プロセスの途中にいるときには多くの葛藤があった。それは、これまで行ってきた単純に「ボクの家」について考えるという「想い（イメージ）」を馳せることから現実的に「 形 」に変えていく作業への移行の中にあった。その「 想い（イメージ）」と「 形 」には差異があり、多くの葛藤を生んだ。また自分と他者との交渉から自分の理想と家族の理想、建築家の理想との地平が融合するためにはどうすべきなのかということも考えさせられた。さらに土地と建物の現実的な制約の問題を知らしめされ、形や建築コストといった現実を受け入れることにも多くの葛藤があった。

これまで行ってきた２度の活動報告で家について、現実的な作業を通して省みるとそこには理想論しかなかったかのように見える。実際のところ形無いものが形を持つ（形作る）ことに自分の想いがそのまま形になるわけではないと思えた。また、自分の想いというものが常に正しいわけではなく、他者の意見によって自分の想いよりもずっと良い形になり、はっと驚かせられるという経験もした。結局のところ、家作りは（当たり前であるが）作り始めてみなければ目に見えてこないのであった。

その土地を見つけたきっかけは努力して探した結果ではなかった。「たまたま見つけた」、その表現以外を使おうと思うと運命的や啓示的といった大げさなものになってしまうため、偶然を採用したい。その偶然とは古くから使っていたテレビが見にくくなり、大型電器量販店のお年玉セールの時に、思った以上の値切りに成功したため購入したテレビがきっかけであった。

最近のテレビはウェブブラウジングができる。せっかくの機能であったため一度くらいは使ってみようと思い、ケーブルを接続し起動してみた。最初から設定してあったサイトは見慣れないものであったが、一般的なポータルサイトの形をとっていたので使い方には困らず、いくつかの項目を見てみようと思った。そこで気になったのが「不動産」の項目であった。その当時、家を建てるのはもう一年先であると考えていた。理由は単純に資金

としての頭金がないためであった。しかし、その「不動産」の項目で見つけた土地は一年先であるという想いを打ち崩した。

これまでインターネットで土地の検索を行ったことは多くあった。しかし、テレビによってつながったサイトはこれまで使用したことがないものであり、半ば導かれたようにその土地を見つけた。サイトで見つけた土地の場所、値段、広さは理想的であった。値段に関してはその周辺の相場に対して 1/5 程度であり、あまりの条件の良さに訝しがらざるを得ない何かを感じた。とにかく、その土地を実際に見て、安さの理由は何であるかを確認することにした。

初めてその土地を見たときは正直なところその傾斜の具合に驚いた。土地のほとんどが川に向かって傾斜しており、どの面に家を建てることができるのかわからなかった。通常の考えからだとそこに家を建てるという発想はなく、あれは宅地ではない、ただの崖であると思うだろう。しかし、土地を見つけて、そして確認してから 1 週間後の住宅ノートを見てみると、小野氏にすでに土地を見てもらいたいと依頼し、またいわゆる金策に悩み、銀行員の友人に相談を持ちかけていたことがわかった。「たまたま見つけた」土地に対する価値判断は早い段階で買いであった。悩んだのは専門的視点からの補強意見があるかどうかとどのようにして購入したらよいのかという方法論についてであった。

その土地の可能性をいわゆる一般の視点から外れたところで見ていけたのはこれまでの活動の成果であったと思う。つまり、土地の価値を資産としてのみ読み取ろうとするのではなく、建つであろう形を、土地を見た結果でイメージして、土地の可能性について読み取ることになったのだと思われる。しかし、そのときの間違いなく面白い家になるという思いこみは、その段階では家族にとって喜ばしくない発想であった。

土地を見た瞬間に一つのイメージが目に浮かんだ。それは以前から興味を持っていたスイスの建築家ピーター・ズントー（Peter Zumthor）作のヴァルスの温泉施設（Therme Vals）だった。私にとっての傾斜地における建築の理想はこれであった。理想となった理由は風景との一体化であった。それはその敷地にフィットした建築であり、おそらくずっとそこにあることが許される建築であると思ったからである。これから建てるかもしれない家もそのようにあって欲しいとそのとき思った。

小野氏は『ヴィヴィット・テクノロジー』のあとがきの中で「思えば建築家は「見えない風景を見えるようにする」（松山巌）ことが役割だとしたら、可視化した風景とその後こそが建築家の責務が問われる部分であろう」（小野 .2007.p.280）と述べている。私自

身は建築家ではないのだが、そのときに「見えないはずの風景が見えたような気がした」のであった。おそらく写真で見たヴァルスの温泉施設と川に向かって傾いている土地が私のイメージの中で重なり合い、「見えた気がした」のだと思う。このイメージが私の購買意欲を高めたと言って良い。

イメージの惹起によって購入意欲が高まったのだが、購入の決断は一人で決めることはできない。これから行おうとしていることは高額な買い物である。また生活の拠点としてその場所に腰を据えるなどの意味から妻（家族）と十分に話し込まなくてはならなかった。妻においてはこの土地の購入について私のいつもの物を欲しがる一種の癖のように捉えていたようだった。つまり、待っていれば熱はいつか冷めるだろうと思っていたようだ。ところが私の熱は冷めることなく購入の算段が進んでいき、妻とは何度か衝突することとなった。お互いにとってその土地が本当に必要なのかを何度か話し合った。建築家や家づくりサポートを行っている専門家などから意見を聴きつつ、それらの情報を可能な限り包括的に捉えて、購入へ進んでいった（実際のところ妻にとっては私に押し切られたという印象を強く持っているかもしれないが）。

妻にとっての一番の不安は安全性であった。住宅ノートに「あんな斜面に家が建つのか？」という妻の記述が残っている。これはもっともな意見であり、いくらか建築についてわかってきたとはいえ、構造における安全性について正直なところ全くわかっていなかった。また、河川局から建築を許可するためには 100 年に一度の洪水によって敷地が浚われても自立する家でなければならないという注文を突きつけられていた。このような安全性に関しては私の方から解説できないので、回答を小野氏に依頼した。これは今回のプロジェクトの重要な課題となった。そして、その部分を計算上解決する（その時点では仮の段階であったが）ことで土地を買う流れはずいぶん前進することとなった。

土地によって引き出された私の中のイメージは日々膨らんでいった。そのイメージは現実的な問題としてある予算の制約などがない幻想的なものであった。その幻想は雑誌で掲載されている笑顔で写る家族の食事の場面や窓を開け放ってテラスでくつろいでいる風景と似ていた。どこか非現実的な姿で、生活を写しているようであるが、実は作られたありきたりな固定概念であったかもしれない。住むことは笑顔で止まっている人々のことを指しているわけではない。それは時間的な変化や肌で感じる質的な変化を含んだアクチュアルな出来事によって成り立っている。瞬間的に買うという行為に飲み込まれて幻想が生まれたに過ぎないと今は思うのだが、私たちが思い描く未来とはどこか非現実的な要素を多

分に持っていると思う。2節で述べた住むことの考察は土地を見た段階ではまだ理想論であったかもしれない。

## 4．待つことが施主の仕事
## ――銀行融資審査と着工までのプロセスからわかったこと――

土地を購入すると決めた後に行うことは金融機関から融資可能かどうかの審査を受けることであった。審査を受けて融資を得ることは、施主が担う家作りにおける重要パートであった。この審査で私は疲弊させられたのだが、家作りにおける施主の実務は実のところこの部分しかないのではないだろうかと思わされた。それは重要な仕事であり、返済が可能な額を金融機関から借り入れ、その金額をもとにどの程度の規模の建築が可能かを検討することになる。建築家は金額に見合った建築を考え、それを形にするのである。

建築家が形を考えることとは違った種類で、施主はいわゆる金策に苦心惨憺する。その苦心は私だけにおきた個人的なものだったのだろうか。それについて自身が建築家であり、自邸を建てた馬場正尊『「新しい郊外」の家』（2009）を見てみると同様に融資を受けるための審査に苦心していた。その中で馬場氏は融資のための審査の難しさを経験し、許可が下りない度に「まるで大学受験の不合格通知を受け取ったときの気分」（馬場 .2009. p.73）と表現している。私も最初に審査に行った銀行で、融資額0円の査定を受けた。そのために馬場氏のこの表現場身にしみて理解できる。

通常、住宅ローンを借りる際に審査される内容は、完済時の年齢、勤務形態（勤務先）と勤務年数、返済負担率、借り入れ申込金額と頭金、健康状態、購入物件であるとされる。これらの内、多くの部分が私自身に対する審査である。もっとも苦心したのはこの私自身を査定されるという部分であった。住宅ローンを組む際の査定は言い換えれば私自身の価値を金銭的に査定されることであったような気がしている。「あなたの現状に対してこの金額までしかお貸しできません」という査定である。これには過去の収入の実績が必要で、未来への可能性で判断されるわけではない。これまでどのくらい稼げたのか、それが私に突きつけられた私の価値であった。

極端に言えばこれまでどのように生きてきたのかを知らせて、それについての査定をされる。ローンの借り入れには返済ができるかどうかを調査するのは当たり前であるが、査定を受けている際は今の私を全く見てくれないと言った感覚があり、それに違和感を覚え

た。私自身の何かをひどく刺激され、審査を受けている最中（10 日前後かかる）は精神的に落ち着かない日々が続いた。

全部で 5 つの金融機関の審査を受けた。同時進行での審査もあったが、満額回答は 1 つだけであり、他の 4 つは希望融資額の 8 から 9 割の回答であった。先に述べたように融資不可との回答もあった。これらの結果は私に対する信用に関わっており、そこから、社会的価値が低いという査定を受けたように感じた。妄想的であったかもしれないが、そのときは確かにそれに悩まされた。

この感覚の根底にあるのは 1 節で述べたナルシシズムにあるのだと思う。審査に通って当たり前だという過信したナルシシズムである。付け加えて、このチャンスを失いたくないという恐怖でもあった。私の中の臆病さが表面化し、それをうまく支配できなかった。「これまで」が査定対象であるためじたばたしても何も変わらないことはわかっていても焦り、その焦りに苦しめられた。追い込まれる日々が長くなるにつれてナルシシズムを満たされたいとの思いよりもこの苦しみから早く脱したいとの思いが強くなっていった。ここではただ待つことのみが許されていた。

ただ、待つことしかできなかった銀行審査は私に対して苦痛を与えてくれた。感覚に刺激するのではなく、何かすることに意味を持たせず、単に待ちなさいと指示されただけの期間、私の中で根拠をもてない可否の結果が激しく揺れ動いた。結果次第で夢が潰えるため、可であることしか望まないのであるが、否が連続していた中での待つことの中に希望は薄れて行っていた。

今になっては、土地の価値と私の価値のどちらに審査の影響が強く出たのかはわからない。ただし、家を建てることの根本的理由が自身のナルシシズムを満たすための部分があったため、私の価値を計られることに苦しめられた。結果的には住宅ローン審査が通って、施主としての重要な仕事を成し遂げたと感じたのだが、突きつけられた私自身の価値の問題は何も解決していない。たまたま受け入れてくれる場所があったという偶然に委ねたという解釈でしかない。

以上のように銀行審査を待つ間は希望の行き先を閉じられる可能性があったため苦痛であった。しかし、待つことは終わらない。施主は家が竣工するまでの期間も待たなくてはならない。現状では土地を見つけてから約 2 年の間待つことを命じられている。ただし、銀行審査の時の待つとは意味も感覚的にも違っている。私たち家族の希望のために待つのである。

この活動の第1回目の報告で、施主が家に対して行うべきことは「建つであろう家の構想を具体的に顕にする」ことであると述べた。この考えは今も揺らいではいない。さらに、2節で住むことをある程度明確にし、それを伝えることが施主の家作りなのだと考える。今回、実際の家作りを通して、これらがどこまで実践できたのだろうか。

現状（2010年2月上旬）では、家の設計が終わり、春に建築が始まることになっている。小野氏によって設計された家は特殊な敷地の景観を壊さず、しかし、大胆かつ複雑な形になっている。この設計に行き着くまでに3度の抜本的な変更を余儀なくされた。それは敷地の制約と資金の制約が理由である。

住宅設計の際に建築家は施主の要望のヒヤリングを行い、それを含めた形を作る。どのような形にして欲しいと言うよりも、こんな機能が欲しいという形の注文が多かったと思う。私と妻と子供にとって必要な機能を伝えた。また、少々抽象的な課題への回答を促すような注文もした。小野氏へEメールで送った代表的な注文を以下に示す。

住むことについて考えました。
そこで、出てきたキーワードが快適性・行動性・生産性でした。
これはアクチュアルな住宅に対応します。
1. 快適性:温度・風景・イメージとして柔らかい、家族との快適な距離が保たれている。
2. 行動性：家全体の温度が安定しており、のびのびと行動ができる。
　→したいことがあってそれができるようなスペース
3. 生産性：住宅と家族が何かを生み出せる家。
　→住宅がエネルギーや野菜を生み出す。家族が何かをプロダクトする。
これら3つのキーワードをつないでいくことがアクチュアルの要素であると思っています（2009年4月27日のEメール）

私にとっての最も重要な注文は以上の3点であった。小野氏がこの注文をどのように解釈するのかが私の楽しみであり、逆に不安でもあった。この注文は言葉であり、形を持っていない。それが小野氏によって解釈され、どのような形になるのかはほとんど想像が付かない。ヒヤリングが終われば、あとは待つだけであった。

ところで、待つことの中には何が含まれているのだろうか。おそらくその根底には信頼があるのだと思う。ただし、それは相手を絶対的に信頼するのではなく、相手を信頼しな

くてはならないという信念である。また、相手にこちらの希望を読み取ってもらっているという期待がある。さらに、待つことに終わりが来るだろうという確信が同時にあると考える。

家作りを実際に開始して、待つことが非常に多かった。その根本的理由は一人ではなく、かならず私とは別の誰かの行為があったからだ。その行為の行く末を待っていたのだ。無人島でたった一人の小屋作りの際には待つ必要はない。その理由は家を作る行為の主体が自分であるからである。しかし、通常の家作りは誰かとの協働行為である。そして、施主が実務として行える行為は金策なのである。それ自体も金融機関に判断を委ね待たなければならなかった。

今回見つけた土地には多くの制約があったため待つことは避けられない、その覚悟があり臨んだ家作りなのだが、家の姿が少しずつ見えてくるについて急ぎ足になる自分がいる。ふと気づくと新たな生活に夢を馳せている自分がいる。これまでの活動の成果がイメージから形になることへの喜びと安心は不安や焦燥といった副作用を呈させる。

私にとって待つことは私の存在を小さくしつつ、誰かに可能性を託すことである。待つことは私から超えでた希望を誰かに探ってもらうことである。いくつもの制約を乗り越えてやがて行き着く終焉を迎える準備のために私は待つのである。

今は家作りから家に住むことへの移行期である。言い換えれば私はイメージから形の移行の間に住んでいる。ここには希望があり、未来に向かう意志がある。

施主である私は住むために建てる私たちの家作りはいよいよ佳境にさしかかったのだ。

## 注

1　堀寛史・小野暁彦 (2008). アクチュアルな住宅をつくるために――ボクの家プロジェクト「施主編プロローグ / 建築家編」―― 臨床哲学 9, pp.61-90.

2　堀寛史・小野暁彦 (2009). うちとそとにひらかれた「自分〈たち〉の場所――ボクの家プロジェクト展開部―― 臨床哲学 10, pp.35-80.

3　四なる集い（das Geviert）とは、大地と天、神的なものたちと死すべき者の四者の統一を指している。

## 引用文献

マルティン・ハイデガー, 原佑, 渡邊二郎訳（2003）『存在と時間Ｉ』. 中公クラシック W29. 中央公論新社.
マルティン・ハイデガー , 大宮勘一郎訳（2009）「建てる 住む 思考する」, ハイデガー 生誕 120 年、危機の時代の思索者 ,KAWADE 道の手帖 , 河出書房新社 ,pp.128 － 148.
白川静（2003）『常用字解』平凡社 .
小野暁彦・門脇哲也・乾陽亮編著（2007）『ヴィヴィット・テクノロジー　建築を触発する構造』, 学芸出版社 .
馬場正尊（2009）『「新しい郊外」の家』, 太田出版 .

## 参考文献

ローゼン作 , ブレイク絵 , 谷川俊太郎訳（2004）『悲しい本』, あかね書房 .
荒井良二（2005）『きょうというひ』, ＢＬ出版 .
アンデルセン , 掛川恭子訳（2006）『マッチ売りの少女』，ぽるぶ出版 .
サイモン・クリッチリー，杉本隆久ら訳（2009）『哲学者たちの死に方』，河出出版書房新社 .
鷲田清一（2006）『「待つ」ということ』，角川選書 .